

1 構造体

構造体とは、変数を一つにまとめて定義されるユーザー定義の型になります。

① ユーザー定義の型

ユーザー定義の型とは構造体やクラスのことを言います。C 言語や C++で扱える変数の型は大きく区別すると下記の二つがあります。

組み込み型

int, short, char, long など

ユーザー定義型

構造体、クラス、enum など

② なぜ構造体を使うのか？

変数を意味のある一つの塊にまとめると可読性が上がり、コードの保守性も向上するため。

③ 構造体の書き方。

では、ゲームでよくあるプレイヤーに関する変数を構造体に変更する方法を記述します。
変更前

```
int main(){
    int playerHp = 100;           //プレイヤーの HP
    int playerMp = 200;           //プレイヤーの MP
    int playerLv = 20;            //プレイヤーのレベル
    std::cout << playerHp;
    std::cout << playerMp;
    std::cout << playerLv;
}
```

変更後

```
//Player という新しいユーザー型を定義。
//これが構造体。
struct Player{
    int hp;    //HP
    int mp;    //MP
    int lv;    //レベル
};
int main()
{
    //Player 型の変数の player を定義。
    //定義の仕方は組み込み型と同じ。
    Player player;
    std::cout << player.hp;
    std::cout << player.mp;
    std::cout << player.lv;
}
```

グローバル変数とローカル変数とスタティック変数

C 言語にはグローバル変数とローカル変数とスタティック変数というものがあります。これらの変数の違いは何かというと、変数のスコープが異なります。(スタティック変数について今回は説明しません。スタティック変数の説明は後日 C++III で解説予定のファイル分割の時に説明します。)

① スコープ

スコープとはその変数の有効範囲を意味します。例えば下記の `playerHp` という変数を考えてみましょう。

```
void FuncA()
{
    int playerHp;    //プレイヤーの HP を定義。これはローカル変数。
    playerHp = 100;  //プレイヤーの HP に 100 を設定。
    std::cout << playerHp;
}
void FuncB()
{
    std::cout << playerHp; //コンパイルエラー!!! playerHp は定義されていない。!!
}
```

`playerHp` は関数内で定義されているため、ローカル変数と言われる変数になります。ローカル変数とは定義された関数ないでのみ有効なため、`playerHp` は `FuncB` で使用することはできず、`playerHp` は定義されていない! というコンパイルエラーが発生します。

ローカル変数だけではプレイヤーの HP のような、ゲーム中いたるところで使用しそうな変数の扱いに困ってしまいます。そのため、すべての関数でアクセス可能な変数、グローバル変数という変数が存在します。では `playerHp` をグローバル変数に変更してみましょう。

```
int playerHp;    //プレイヤーの HP を定義。これはグローバル変数。
void FuncA()
{
    playerHp = 100;    //プレイヤーの HP に 100 を設定。
    std::cout << playerHp; //プレイヤーの HP を表示。
}
void FuncB()
{
```

```
std::cout << playerHp; //グローバル変数なのでアクセスできる。
}
```

このように、`playerHp` はグローバル変数になったため、プログラムのどこからでも参照できるようになりました。

また、ローカル変数は関数を抜けると破棄されてしまうため、関数を抜けた後は値を保持しておくことができません。ゲームプレイ中など永続的に値を保持したい場合はグローバル変数を使用することになるでしょう。

Tips

実はグローバル変数の乱用は決して褒められたことではありません。極端な話、ローカル変数を一切使わずに、すべてグローバル変数を使用してプログラムを書くことも可能です。しかし、そのようなコードを書いていた場合プログラムが巨大になってきたときに、あなたは必ず後悔します。そのため、シングルトンパターンなどのようにグローバル変数をもう少しマシに使えるようにするためのテクニックが存在します。ただし、今はグローバル変数の扱いに慣れるため、積極的にグローバル変数を使用してください。慣れたころにこの *tips* の話を思い出してください。

2 関数

関数とは複数の処理を一つにまとめて記述するもので、保守性、再利用性、拡張性を高めます。ソフトウェアを開発するうえで欠かすことのできない非常に重要な要素となります。

簡単な関数の記述法

では、簡単なサンプルコードを見ながら簡単な関数の記述の仕方を見ていきましょう。

関数化する前のコード

```
int main()
{
    //hoge を 10 回インクリメントして、表示するだけの処理。
    int hoge = 0;
    for(int i = 0; i < 10; i++){
        hoge++;
    }
    std::cout << "hoge=" << hoge << "\n";
}
```

では、hoge を 10 回インクリメントして、表示する部分を関数化してみましょう。

```
//hoge を 10 回インクリメントして、表示するだけの関数。
void IncrementAndDispHoge()
{
    int hoge = 0;
    for(int i = 0; i < 10; i++){
        hoge++;
    }
    std::cout << "hoge=" << hoge << "\n";
}
//メイン関数。
int main()
{
    //IncrementAndDispHoge を呼び出す。
    IncrementAndDispHoge();
}
```

これが関数化です。関数とは大きく分けて 3 つの構成要素で成り立っています。

int FunctionName (int argument)

戻り値

関数名

引数

では、次の節からは関数の構成要素を詳しく見ていきましょう。

引数

関数には引数を渡すことができます。引数とは関数に渡すことができるパラメータのことです。

では具体的にプログラムを見てみましょう。先ほどの `IncrementAndDispHoge` 関数で `hoge` を 10 回インクリメントするのではなく、任意の数インクリメントするようにしてほしいという仕様変更が来たとします。その変更に応えるために `IncrementAndDispHoge` を下記のように改造してみましょう。

```
//hoge を incrementCount 回インクリメントして、表示するだけの関数。
void IncrementAndDispHoge( int incrementCount )
{
    int hoge = 0;
    for(int i = 0; i < incrementCount; i++){
        hoge++;
    }
    std::cout << "hoge=" << hoge << "¥n";
}
//メイン関数。
int main()
{
    IncrementAndDispHoge( 10 );    //hoge を 10 回インクリメントして表示する。
    IncrementAndDispHoge( 6 );    //hoge を 6 回インクリメントして表示する。
    IncrementAndDispHoge( 4 );    //hoge を 4 回インクリメントして表示する。
    IncrementAndDispHoge( 1000 ); //hoge を 1000 回インクリメントして表示する。
}
```

これが引数！！

これが引数です。`IncrementAndDispHoge` に引数を渡すようにしただけで、関数というものの有効性が少し見えてきたのではないかと思います。

戻り値

戻り値とは関数が返してくる結果のことを言います。では、具体的なコードを見てみましょう。

```
//平均点を計算する関数。
float CalcAvg( int score0, int score1, int score2, int score3 )
{
    float value = 0;
    value += score0;
    value += score1;
    value += score2;
    value += score3;
    value /= 4;
    return value; //計算した平均点を返す。
}

int main()
{
    //成績
    int score[4] = {60, 40, 20, 30};
    float avg = CalcAvg(score[0], score[1], score[2], score[3]);
    std::cout << "平均点=" << avg << "¥n";
}
```

戻り値！

これが戻り値と言われるものです。Calc 関数の中で計算した結果を **return** 文を使用して返しています。

関数を使用するメリット

では関数を使用するメリットを具体的なプログラムを見ていきましょう。

4クラスの平均点を求めて表示するプログラムを関数化していない場合。

```
int main()
{
    //A クラスの平均点を求める。
    int AclassScore[3];
    for (int i = 0; i < 3; i++) {
        std::cout << "A クラスの成績を入力してください。";
        std::cin >> AclassScore[i];
        std::cout << "¥n";
    }
    //平均を求める。
    int totalScore = 0;
    for (int i = 0; i < 3; i++) {
        totalScore += AclassScore[i];
    }
    std::cout << "A クラスの平均点は" << totalScore / 3 << "です¥n¥n";

    //B クラスの平均点を求める。
    totalScore = 0;
    int BClassscore[2];
    for (int i = 0; i < 2; i++) {
        std::cout << "B クラスの成績を入力してください。";
        std::cin >> BClassscore[i];
        std::cout << "¥n";
    }
    //平均を求める。
    totalScore = 0;
    for (int i = 0; i < 2; i++) {
        totalScore += BClassscore[i];
    }
    std::cout << "B クラスの平均点は" << totalScore / 2 << "です¥n¥n";

    //C クラスの平均点を求める。
    int CClassscore[3];
    for (int i = 0; i < 3; i++) {
        std::cout << "C クラスの成績を入力してください。";
        std::cin >> CClassscore[i];
        std::cout << "¥n";
    }
    //平均を求める。
    totalScore = 0;
    for (int i = 0; i < 3; i++) {
        totalScore += CClassscore[i];
    }
    std::cout << "C クラスの平均点は" << totalScore / 3 << "です¥n¥n";

    //D クラスの平均点を求める。
    int DClassscore[4];
    for (int i = 0; i < 4; i++) {
        std::cout << "D クラスの国語の成績を入力してください。";
```

```

        std::cin >> DClassscore[i];
        std::cout << "¥n";
    }
    //平均を求める。
    totalScore = 0;
    for (int i = 0; i < 3; i++) {
        totalScore += DClassscore[i];
    }
    std::cout << "D クラスの平均点は" << totalScore / 3 << "です¥n¥n";
    return 0;
}

```

このプログラムにはプログラムの間違いが存在していて、このバグを修正するためには8箇所の修正が必要になり、また見つけるのも困難です。

では平均を求める処理と表示する処理を関数化したプログラムを見てみましょう。

```

//クラスの成績の入力と表示を行う関数。
//className クラス名
//numStudent 生徒の数。
void InputAndDispClassScore( const char* className, int numStudent)
{
    int classScore[256];
    for (int i = 0; i < numStudent; i++) {
        std::cout << className;
        std::cout << "の成績を入力してください。 ";
        std::cin >> classScore[i];
        std::cout << "¥n";
    }
    //平均を求める。
    int totalScore = 0;
    for (int i = 0; i < numStudent-1; i++) {
        totalScore += classScore[i];
    }
    std::cout << className << "の平均点は" << totalScore / (numStudent-1) << "です¥n¥n";
}
int main()
{
    //A クラスの成績入力と表示。
    InputAndDispClassScore("A クラス", 3);
    //B クラスの成績入力と表示。
    InputAndDispClassScore("B クラス", 2);
    //C クラスの平均点を求める。
    InputAndDispClassScore("C クラス", 3);
    //D クラスの平均点を求める。
    InputAndDispClassScore("D クラス", 4);
    return 0;
}

```

こちらのプログラムにも先ほどのコードと同様の不具合が存在しています。しかしこちらは2か所の修正だけでバグが解消します。このように処理をまとめて、再利用性を高めることにより、不具合の修正や仕様の拡張が容易に行えるようになります。

4 ポインタ

ポインタは C 言語、C++ の大きな壁の一つとされています。ポインタを理解することはメモリを理解することとほぼ同じ意味になります。

4.1 メモリ

ポインタを理解するためにはメモリの理解が必須になりますので、そもそもメモリとは何なのか考えていきましょう。

メモリと言われると皆さん下記のようなキーワードを思い浮かべるのではないのでしょうか。

- USB メモリ
- ハードディスク
- SD カード
- PlayStation や PlayStation2 のメモリーカード
- **メインメモリ**

この他にも色々と思い浮かぶと思いますが、プログラマがメモリというと基本的にはメインメモリのことを差します。ではメインメモリとその他のメモリの違いとはなんのでしょうか？

最も大きな違いは揮発性メモリかどうか、ということです。

4.2 揮発性メモリと不揮発性メモリ

揮発性メモリとは一体なんなのか？これは電力を供給しないと記録している内容が失われてしまうメモリのことを言います。例えばハードディスクはパソコンの電源を切ってもデータが失われることはありません。そのため、ハードディスクは不揮発性のメモリということになります。同じように USB メモリ、SD カード、PlayStation のメモリーカードも不揮発性のメモリです。一方メインメモリは PC の電源を落とすとメモリの内容はすべて失われてしまいます。プログラムで使われるメモリは基本的にメインメモリとなります。もちろんゲームの進行状況などは不揮発性のメモリに記録しておかないと、電源を落とすたびに最初から始めることになります、そのためハードディスクに書き込みを行うこともあります、基本的にメモリというとメインメモリのことを差します。

4.3 メインメモリ(主記憶)

ではメインメモリについて見ていきましょう。皆さんの PC はメインメモリが 8GB ほどあると思いますが、ではプログラムがそのメモリをすべて使用できるのか？というところというわけではありません。例えばあなたの作成したプログラムがすべてのメモリを独占してしまうと、同時に起動している VisualStudio やブラウザなどと言った他のプログラムが

強制終了してしまいます。そのため、プログラムが起動すると OS がそのプログラムが使用できるメモリを割り当てます。

例えば、512 バイトのメモリが割り当てられたケースを考えてみましょう。メモリのイメージは下記のようになります。

メモリアドレス	メモリ空間
1000	未使用
1512	

では、このようなメモリ空間が割り当てられたとして、具体的にプログラムを書いてみてメモリがどのようなになるか見ていきましょう。

```
int main()
{
    int hoge = 10;           //変数は値を記録できる。つまりメモリに領域が確保される。 ①
    hoge += 20;              ②
    int hogehoge = 20;       //変数は値を記録できる。つまりメモリに領域が確保される。 ③
    std::cout << hoge << hogehoge;
    return 0;
}
```

このプログラムを実行した場合、メモリの内容がどうなるか見ていきましょう。

5 ファイル分割

それなりにプログラムの規模が大きくなってくると、ファイルを分割した方が開発しやすくなってきます。C++ですと、1ファイル1クラスが基準になると言われています(厳守する必要はありません)。しかし、C++でのファイル分割はそこまで簡単ではなく、少々やっかいな問題がいくつかあります。今回はそれを見ていきましょう。

ではまずコードが分かれていないプログラムを見てみましょう。

```
//main.cpp
#include <iostream>
//クラス定義
class Player{
    int hp;
public:
    //HPを取得。
    int GetHP();
    //HPを設定。
    void SetHP(int _hp);
};
//HPを取得。
int Player::GetHP()
{
    return hp;
}
//HPを設定。
void Player::SetHP(int _hp)
{
    hp = _hp;
}
int main()
{
    Player pl;
    pl.SetHP(100);
    std::cout << pl.GetHP();
    return 0;
}
```

では、このプログラムをファイル分割してみましょう。Player.h と Player.cpp を追加します。

まず、ヘッダーファイルを見てみましょう。

```
//Player.h
#pragma once //必ず書く!!!
//クラス定義
class Player{
    int hp; //HP
public:
    //HPを取得。
    int GetHP();
    //HPを設定。
    void SetHP(int _hp);
};
```

クラス定義はヘッダーファイルに記述しましょう。そしてヘッダーファイルの先頭には必ず**#pragma once**を記述しましょう。理由は後述します。

では続いて player.cpp を見ていきましょう。

```
//Player.cpp
#include "Player.h"

//HPを取得する関数の定義。
int Player::GetHP()
{
    return hp;
}
//HPを設定する関数の定義。
void Player::SetHP(int _hp)
{
    hp = _hp;
}
```

では最後に main.cpp のソースを見てみましょう。

```
//main.cpp
#include <iostream>
int main()
{
    Player pl; //コンパイルエラー!!!
    pl.SetHP(100);
    std::cout << pl.GetHP();
    return 0;
}
```

さて、上記のコードでは `main.cpp` で `Player.h` がインクルードされていないため、コンパイルエラーが発生します。何故コンパイルエラーが出たのかを詳しく見ていきましょう。

コンパイラというのはソースファイル単位でコンパイルを実行します。つまり `main.cpp` をコンパイルしている時は `Player.cpp` や `Player.h` に記述されている内容をコンパイラは一切知りません。そのため、`main.cpp` をコンパイルしているコンパイラは `Player` というものがどんなメンバ関数があるの、そもそも `Player` はクラスなのか構造体なのか、など一切分からないわけです。そのため、`Player` クラスの内容をコンパイラに教えてやる必要があります。それが `#include` になります。

`Player` クラスの定義が記述されている `Player.h` を `main.cpp` をインクルードすることでコンパイラは `Player` クラスの内容を知ることができ、コンパイルが実行できるのです。

5.1 #include

では、そもそも `#include` とはなんなのか詳しく見ていきましょう。

まず、先ほどの `main.cpp` に `Player.h` をインクルードしてコンパイルエラーを解決しましょう。

```
//main.cpp
#include <iostream>
#include "Player.h"
int main()
{
    Player pl;
    pl.SetHP(100);
    std::cout << pl.GetHP();
    return 0;
}
```

これでコンパイルエラーは発生しなくなります。

では `#include` が何をしているのか見てみましょう。

5.1.2 プリプロセッサ

実は VisualStudio などのコンパイラはコンパイルを行う前にソースコードの変形を行います。これが **プリプロセス** と言われるもので、プリプロセスを行うソフトウェアを **プリプロセッサ** と言います。そして `#` から始まる構文、`#include` や `#pragma` や `#ifdef` などはプリプロセッサに対する命令になります。

では `#include` 命令が記述されているとプリプロセッサはどのようにソースコードを変形するのでしょうか？

実はプリプロセッサは `#include` を見つけると、そこに指定されたファイルの内容をコピーアンドペーストします。

つまり、先ほどの `main.cpp` はプリプロセッサによって、下記のようにソースを変形されます。

```
//main.cpp
#include <iostream>
//クラス定義
class Player{
    int hp; //HP
public:
    //HP を取得。
    int GetHP();
    //HP を設定。
    void SetHP(int _hp);
};
int main()
{
    Player pl;
    pl.SetHP(100);
    std::cout << pl.GetHP();
    return 0;
}
```

このように変形されます。これによって、`main.cpp` をコンパイルしているコンパイラは `Player` クラスが分かるようになります。